

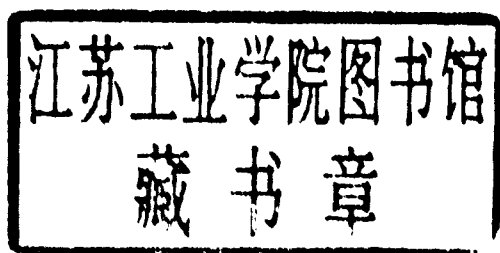
Ведомо Сумолевских

ドストエフスキー全集

19_A

創作ノート Ⅱ

小沼文彦 訳



筑摩書房 刊

ドストエフスキー全集 第19巻A

1991年6月20日初版第1刷発行

1991年12月1日初版第2刷発行

訳者 小沼文彦

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4

電話 東京 (5687) 2680 (営業)

(5687) 2670 (編集)

郵便番号 111-91

振替 東京 6-4 123

© 1991 小沼文彦 Printed in Japan ISBN 4-480-77119-0 C 0398

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてにご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

創作ノート II

『未成年』創作ノート

あとがき

『未成年』創作ノート

凡 例

一、テキストとしては、現在刊行中の三十巻全集の第十六巻『未成年、手稿』(Подготовка: Рыжовичные Редакции 一九七六年)を使用し、一九六五年に刊行されたI・S・ジリベルシテイン、L・M・ローゼンブリュム監修の『文学遺産』シリーズ第七十七巻『Ф. М. Достоевский в работе над романом «Подготовка»』を参照した。

なお、この二つのテキストには文の順序、パラグラフの切り方などに多少の相違が見られるが、煩瑣になるのを避けるために全集版を決定稿として、特別の場合を除き(その場合には後者をBと表記した)いちいちその異同は示さなかった。

二、作者がのちに書き加えた部分で、『創作ノート』の編纂者が本文に挿入した語句は(ハ)でつつんだ。

三、作者が「ノート」作成の過程で抹消した部分は(≡)でつつみ、本文に挿入されていない書き込みは、それぞれ注をつけて該当する箇所に入れた。

四、語句のヴァリアントはその旨注記し、またa、b、c等で示した。

五、編纂者が推定して補足した語句は(へ)でつつんだ。なお(へ)内のベージの表示も編纂者が記入したものである。

六、注は簡単なもの二行割にして(ハ)でつつみ本文中に挿入し、その他の訳注は適宜段落の末尾にまとめた。

準備資料

〈覚え書き、プラン、草案〉

へ、二七四年二月——七月十日(二十三日)

キリスト教徒のハムレット。

無学文盲のロシヤのお百姓イワン・マトヴェーイエヴィッチ・プロ
ハジモフについての物語。

外典福音書。《N・B 悪魔の誘惑、心の貧しい人々の前で飛ばした粘土の小鳥。エルサラムの社会主義者と民族主義者たち。女たち、子供たち。》

子供たち。再婚した母親。孤児たちの群れ。種ちがい腹ちがいの子供たち。真理のために戦う闘士。苦しめられて疲れ果てた母親の死。子供たちのプロテスト。逃亡? 街頭へ出る。闘士はひとりぼっちになる。放浪、等々。

学校の教師、長篇小説(ゴゴリの作品、たとえば『タラース・プリーバ』)を読んだときの感銘の描写)。さまざまな敵、郷役場の書記(新聞の通信記事はこんな連中を許容している)。Bでは「学校の教師」があとに「キリスト教徒のハムレット」がつづいている)

幻想的な叙事詩、風長篇小説。——未来社会、コンミュニオン、パリにおける一斉蜂起、勝利、二億人の首、恐ろしい疫病、風紀の退廃、芸術や、圖書の類は根絶やしになる、いじめ殺される子供。論争、無法状態。死。

ピストル自殺をした男と『ファウスト』ばりの悪魔。叙事詩風の長篇小説と結びつけて一つにまとめてもよい、その他。

子供たちについての、もっぱら子供たちについての、また主人公である子供についての長篇小説(N・B ひとりの苦しんでいる子供が救い出される、さまざまなトリック、その他)。

捨てられた赤ん坊が見つかった。

フォードル・ペトロローヴィッチ(子供好きな男と乳を与える女)。

フォードル・ペトロローヴィッチは、子供たちに頼まれたことを果たしたあとで、子供たちに向かって言う——「諸君、わたしは諸君に依頼された件を果たしたので、取り急ぎ報告いたします」あるいは——「諸君、わたしはこれこれしかじかの本を読みましたよ」そしてだしぬけに子供たちにシラーのことか、あるいはなにか政治向きのことなどを話して聞かせる(N・B 要するに当人自身、大きな子供なのであって、ただ子供たちに対するこの上なく強い、生きいきとした、悲痛ともいえるほどの愛情に徹しているだけのことなのだ)。

へI、九ページ)

われわれはすっかり年をとって意固地になった自由主義者たち《オレスト・ミルレルの仲間》を、嫌悪の目でながめている。これ

は農民の解放その他が行なわれたことを、いかにも残念がっているといえるような、なんとも不思議な考えにまだにとらわれている連中である。《近づきつつある》われわれはまた、その連中をしないでいとおいつくそうとしてゐる社会主義という雨雲と、きたるべき（ヨーロッパにおける）『コンミニューン』の成功が、ロシアにあるいは見るも無残なさまざまな試みと、不名誉をになうべき恐ろしい権利を生み出すことになるかもしれない人たちがいることを知っている。

人間は最高の模範とされ、いざ自分の力量を最高に發揮する段になると、どんなことでも決してさりげなく、やっつけてけるものではない。——彼はピストル自殺をすることもさりげなくではなく、宗教的にやっつけてける。

「モスクワ報知」、七四年、二月二六日、バフムート発、⁽¹⁸⁾副え馬がわりにさせられた女房の語。

ある男がほかの男に一〇〇〇〇ループリやりたいと思った、だがそれをどう切り出していいか分からない。

神父さんたち（スケッチ）（肉入りコロッケ、勝手にしやがれ、坊主、大学生、その他）。

自分たちの子供だけの帝國を作ろうという子供たちのひそかな計画。共和制にすべきか、君主制にすべきかをめぐっての子供たちの論争。

子供たちは監獄に閉じこめられている少年犯罪者たちと連絡をつける。放火犯や列車《破壊》転覆犯の子供たち、子供たちは悪魔を思いのままにあやつる。子供たちとはいっても——みんなふしだらで無神論者。

ランペルト。Andrius（⁽¹⁹⁾アンドリウス）。父親殺しの罪を犯した——子供たち

（「モスクワ」報知」第八九号、四月二二日）。

ある役人、彼の結婚式、捨て子の赤ん坊。——養育院を開き、寄付を受けつけ、退職する。

またもう一人の役人は（これとは反対で）ご当人がまだ子供、等々。
（一〇ページ）

あるモメント。青（年）（闘争の理想）と、ピストル自殺を決意している、そのかつての友人とのあわただしい出会い。彼と二人で過ごした一日。その男はピストル自殺をする。

デュッソー、あるいはマール（エイ）・ヤロスラーヴェツの食堂での魔術師。ころりと落ちた首、等々。（あとからの書き入れ（嘘つき）の少年がこの話をして「僕はこの目でちゃんと見たんだよ」と言う。）

肉食動物のタイプ（アフセイエンコのダニロ公（⁽²⁰⁾評））。なぜダニロ公爵のような馬鹿な男にわたしの注意を惹きつける権利があるのか。アフセイエンコは、お祝いの日に間に合うように間違

なくベテルブルクへ帰ったに相違ない単なる野心家と、それとは反対に、生まれついで自由奔放な性格から、ついに帰ろうとはしなかったダニロ公爵とを対比させている。それと言うのも彼は情熱家で、ミルーシャと結婚して、情熱のほとばしるままに、どこまでも自由でありたいと思っているからである。ところがあとになって彼は、どうして帰らなかつたのだろうと泣きごとを並べている。N・B これは彼が、要するに、——馬鹿な男だからである。本物の肉食動物タイプの男であったなら、ミルーシャともきちんと結婚したうえで、さっさと帰って行ったにちがいないのだ。これはあるいは不道德なことであるかもしれないが、完璧な肉食動物タイプの男だったならば、たとえ

後悔はしても、それでもなおありとあらゆる罪と情欲に身をまかせつづけたことだろう。

彼らには肉食動物のタイプなるものが分かつてはいないのだ。

N・B N・B 《一八七五年に予定している》一八七五年のわたしの長篇小説では本物の肉食動物のタイプの男を念頭に置くこと。

これはもう正真正銘の英雄的タイプの人物であつて、世間の人たちやその現実の生活を超越している。したがつてかならず世間の人たちのお気に召すに相違ない。(ところが、早い話が、ダニエロ公〈爵〉となると、どうあがいても気に入られるはずがないのだ。)

N・B このタイプについて考えること。(余白に 肉食動物のタイプ(一八七五年の)。

情熱の激しさと性格のものすごい幅の広さ。最も卑しむべき粗暴さと、この上なく洗練された大らかな心とが同居している。そしてそれにもかかわらず、この果て知れぬ幅の広さをきわめてうまい具合に持続させていくところに、この性格の強さがある。そんなわけで、ついには、その身に不相応な重荷を求めることになるのだが、それを見出すことができない。そのために魅力的でもあれば、またいやらしいということにもなる(赤いかぶと虫、スタヴロギン)。

《甘んじて》平手打ちを忍び、ひそかに復讐をはたす。相手の名誉を傷つけ、大きな感銘を受けた。

七四年五月四日
ちようど新月になつたばかり。へー、一ページ

正確であること——c'est la politesse des rois (これは王者の礼儀。だよ、フランス語)

——しかしあなたは別に王様ではないじゃないか。
肉食〈動物〉タイプの男は公爵夫人と顔を合わせた際、公爵のとろでの自分の立場を犠牲にして夫人に乱暴な口をきく。だがかえつてそれが彼女のお気に召す。

かつて去熟派信徒の仲間に加わり、この宗派に身を投じようと思ひ立つたことがあつた(金銭)。

遣り口の汚ないジエロムスキー(手稿では「ニエ」)は、いつもちよこまか動きまわっている、しがない弁護士。肖像画。(彼は自分が依頼を受けた一件を敵方の弁護士に一任した。)

社会の基盤に、改革もたらした革命によってひびがはいるようになった。海が濁りはじめた。善と悪の定義とけじめが消え失せ、ぼやけてしまった。Z・A・Rとジエロムスキー。いまの世の中ではとても誠実になど生きられるものではない。社会環境の、社会の趨勢の特質。

ヴェーチエロムとは単にヴェーチエロム(晩方)ということの意味するだけで、ヴェチヨールというのは昨晩を意味する。

ではあなたは、するとつまり、わたしの訴訟事件を食いものにするつもりだったのですね。あるいは、——すこしばかりそのおこぼれをちようだいしたわけですね。

〔スタヘーラヤ・ルツサ。〕

青年(N・B 大いなる罪びと)は、一連の進歩的墮落行為のあと

で突然、精神においても、意志においても、開明度の点でも、意識の点でも、それこそ最高の境地に到達する。(読者には説明しないで、まったくだしぬけに。問題はすべて、精神的大変動という課題は一にも二にも、悪に属する場合にもあっさり単純にはなく、はつきりとした悪意をもって『意識的に』屈する、彼の性格に根ざしたものであったということにある、等々) (一、二二ページ)

われわれから見れば彼の現われ方は——天空に姿を現わしたかと思ふと、あつと言ふ間に沈んでしまふ、新月のようなものであつた。

エムス、肉食動物のタイプについて考えること。悪の意識をできるだけ強いものにする。それが悪であることをちゃんと心得てもいれば、後悔もしている、それなのに同じく偉大な衝動にかられて平然として悪を行なう。つまりその、まったく同時に二つの行動に出ることができるといふわけなのだ。つまり一つの(余白に付記 ある人々に対して)行動に出た場合には、彼は心底から、偉大な義人であり、その精神は高揚し、限らない感動につつまれて、自分の行動に喜びを覚える。ところが別の行動に出た場合には、(別の人たちに対しては)——恐ろしい犯罪者、嘘つき、そして不身持な男である。(しかし一人きりになったときには、それをもこれをも傲然と、気落ちしたような顔でながめ、すっかり見切りをつけて、決定を引き延ばしている。)彼は情欲が目がくらんでいるのだ。ここには——情欲があり、彼はこれと闘ふことはできないし、また闘おうともしない。その一方には——彼を浄化してくれる理想があり、また感動そのものであり、感動的な行為という偉業がある。この二つの面と、これに巻き込まれる人たちが、

この長篇の結末近くで鉢合わせをする。不信仰、卑劣な行為と虚栄のまったく中にあつても平然としていられる自分の天与の生命力の強さに、彼は心から憎しみをいだいている。

!! 課題。小説を一本化する——子供たちの物語とこれを一つにまとめるほうが自然ではあるまいか。

この肉食動物のタイプはなかなかの懐疑家である。彼を取り巻いている人たちのあいだにはさまざまな社会思想の持ち主がいる、彼はそうした人々を嘲笑する。ほかの人たちの(ひとりの少年の)理想を情け容赦もなく打ち砕き、そのことに楽しみを見出す。

特徴、——さまざまな悪業にもかかわらず、彼は誰に対してもいたって親切で礼儀正しい。平然として悪を行ないながらも、自分がさんざんに苦しめた相手、自分のために身を滅ぼした人間にいかにも人のよさそうな、親しげで好意のこもった顔さえも見せたりする。——

「おいおい、なんだって君はわざわざわたしの前にしゃしゃり出てきたんだね。わたしは自分の気紛れをどうしても満足させなけりゃならなかったんだ。それにわたしはどんな小さな気紛れでも、君のために犠牲にするわけにはいかないんだよ」

N・B それでいながらどうかすると他人のきわめて小さな気紛れのために、あらゆるものを犠牲にすることもある。

(余白に 彼には(理論とまでは言えないにしても) つぎのような信念がある——つまり、もう一つの生などというものはない、わたしがこの地上に生をうけているのはほんの一瞬にすぎないのだから、なんの遠慮気兼ねがないものか。しかし社会生活の約束ごとが社会によつ

て一種の契約のように確立されているので、べてんにかけるならこっそりとかけ、契約を破るならこっそりと破ることだ、そしてそのために調和が破られ」(I、一三ページ) 将来の社会にとってたえ不協和音が生じるにしても、そんなことが——「このわたしなんの関わりがあるだろう。かりにそうした約束ごとが《いずれ将来どころか、いまこの瞬間に、しかもそれと同時にこのわたしもろとも》姿を消すことになったにしても、*apres moi le deluge* (あと野となれ山と) だ」(《わが国で土地を瘦せ衰えさせ、森林を根絶やしにしているのと、同じようなものさ——という対比。(しかし) こうした信念はなにも、未来の生なんでもは存在しないという理論から生まれたものではない。それに彼自身も、自分の性格がこんなふうになったのは、あるいは理論のせいかもしれないなんてことは、頭から一笑に付している。しかし彼は間違っている——それは理論のせいではなくて、この理論のフィリングのせいなのだ。それと言うのも、彼は信念によるばかりではなく、なにもかもひっくりかえす無神論者だからである。》) 彼にはどちらかと言えばつぎのような思考傾向すらもある——つまり、これは実にすばらしい幻影であり印象である、ということがある。となるとそんなものは、一刻も早く消し去ってしまったほうがいい。すべてはほんの一瞬しか存在しないものなのだ。それならばいっそのこと、そんなすばらしいものなんて存在しないほうがいい、というわけなのである。

? N・B この男にある女性が熱烈に恋いこがれている。(二十歳になったばかりの青年がこの女性に恋をする。) この女性、あるいはもう一人の女性、つまりこの男の妻には——子供が何人かいる。子

供たちとは仇敵の間柄。(この男がある少女を誘惑し、少女は子供たちのグループと母親を裏切る。母親は死ぬ思い。)(余白に「母親の子供に對する、自分の腹を痛めた小さな娘に對する嫉妬。しかし嫉妬に狂って娘を問いつめている最中に、《さんざん苦しめ》いきなり接吻の雨を降らせたりする。だが少女は相手を見くだして、うさぐさそうに冷やかな態度をくすそうとしない。母親は、どうしてあんたはわたしを愛してくれないの、と娘に泣きごとを並べる。《母親》少女は病気になる、熱を出してうなされる。母親は一心に看病する。母親が死んだ。少女は後悔のあまりすんでのことに発狂するところだった。彼をなじる(相手が冷淡になり、自分を嘲笑している《と難癖をつけて》)。奇妙な、穏やかではあっても、非現実的な非難である。少女は首をくくって死んだ。母親は死ぬ前には公爵に恋いこがれるようになっていた。

N・B 母親はよい家柄の、彼よりも家格の高い上流社会の出だ。N・B まあ言ってみれば「*ツオロフ*」・「*ダーシコフ*」・伯爵夫人が、医者と結婚したようなものである。公爵がここに顔を見せるのも、こうした社会とつながりがあるからにはかならない。」

彼は子供を捨てる、《その子》少女は首をくくって死んでしまった。かぶと虫。退けても退けても後悔の念にさいなまれ、かぶと虫が現われたからには、もう生きていくことは不可能だと観念する。しかもこの後悔の念が意識的に悪を行なうことのできる力と併存しているのだ。彼はまったく否応なしに意識はしていないが抜き差しならぬ強い憐憫の情に、たちまち息の根をとめられる、そして彼は蠅のように破滅の道をたどる。

プランの胚芽。何人かの連れ子のある妻、義人、地獄の責苦せきくにあわされている彼のいけにえ、彼のためにあらゆるものを犠牲にし、彼のためにゴヘリーツィン公爵を死に追いやった（公爵の死のいきさつ）、自分を責めさいなむ男に身も心も捧げつくした。責めさいなむことよって快樂を得るために、彼は彼女を地獄の苦しみにあわせる。子供たちの群れとそのひそかな計画。これを裏切ったのは一人の少女で、彼の妻の娘、つまり彼の義理の娘。小さな子供のおとなびた恋。母親の死後、少女は首をくくって死んでしまった（かぶと虫が現われるのはこのときである）。

母親と小さな娘が互いに嫉妬し合う。（子供たちの群れの相談相手と指導者はフョードル・フョードロヴィッチ、これは白痴。）

これは——彼の行動の暗黒面。その明るい面はある若い娘、あるいは他人の妻に対する愛の中に見られる。（現にへー、一四ページ）彼の本妻、つまり義理の娘の母親が死んだのは、この他人の妻に対する嫉妬のためにほかならない。そちら、つまりこの婦人とのあいだでは、それにそちらに関係のあるどんな状況においても、彼は明朗で、心が広く、英雄的である。

!?! N・B 彼は人知れず善事を行ない、困窮している人たちを見舞ったりする。子供たちの群れ（帝国）が人の噂でこのことを知った。ここでこれもやはり英雄的な少年が登場する。この少年は彼から強い衝撃を受け、彼に驚嘆し、グループを裏切って、彼のもとへ走り、彼の熱烈なファンになる。子供たちのグループとの彼の付き合ひ。ところがある一人の英雄的な少年、グループのリーダー、皇帝（帝国にするか、それとも共和国がいいか？——論争）は、彼に屈伏しないで、敵意を強める。この少年はいままでずっと彼の側に走った少年の競争

相手であり、敵であったが、実はひそかに親友をもって任じている。ところがいまやこの少年が彼の側に走ってしまったので、この少年は苦しみ悩み、苦しみのあまり自殺をはかるにいたる。（Bの注「左側の余白顔の」）

N・B 義理の娘が首をくくって死んでも、彼はあまりかわいそうとは思わない、それよりも彼は（その意志に反して）死んだ妻（のために）に対して、はるかに強い哀れみの情を燃えあがらせる。（N・B N・B 少年が彼に平手打ちをくらわせる。）彼を神のように崇めていた娘（義人）と彼は結婚した、あるいは結婚しようとしている。そしてここでだしぬけにかぶと虫が現われる。《子供たちは》子供たちの共和国は自然の成り行きとして崩壊する。

注釈。これが無神論者の姿。これがこのドラマのいちばん大事な思想（言い換えれば、彼の性格のいちばん大事な本質）。

しかしこの画面を生きいきとしたものにするためには、何人かの現実的で、欠くことのできない（『悪霊』の泉知事のような）人物も、どうしても挿入しなければならない。

彼の社会的地位は——解放された農奴が支払う年賦金で食っている旧地主（だがこれには不審な点がある、よく考えてみなければなるまい）。

（余白に 長篇小説を書きおろすためには、なによりもまず作者が実際にその心で経験した一つの、あるいはいくつかの強烈な印象を貯えておく必要がある。ここに詩人の役割がある。《これ》この印象から テーマ、プラン、均育のとれた全体像が発展してくることになる。芸

術家と詩人はそれぞれの仕事において——どちらの場合にも、互いに助け合うものではあるけれど、これはもう芸術家の仕事と言うべきである。(へI、一五ページ)

N・B 彼は——なにもしないで遊んでいる人間である(旧地主、農奴の支払う年賦金、外国生活)。それで彼の敵(それに二人の妻)は、あの男はなにもしないで遊んでいって、彼を非難する。ところが思いがけなくたまたま彼にとつてなにかある活動の機会(そんなものを考え出すこと)が訪れた。そして彼は第一級の活動家であることが判明する。彼を非難したり嘲笑したりしていた連中は、その際にひとつやりとげることができなかつたのに、彼はなにもかもきれいに片づけてしまったのだ。

フォードル・フォードロヴィッチは、バラノフのような男だ。バシマコーフ(注)とかいう男の事務所勤めていて、自分の仕事のことにはものすごく精通している。

《この役人》フォードル・フォードロヴィッチは結婚しようとしている。(捨てられた赤ん坊)結婚式はお流れになる。妻の扶養。幼い子供たち。——これは子供たちに対する無意識的な情愛。うまくいかなくなってしまった妻と本でも読むような調子で話し合う(彼は大体において素っ気ない話し方をする)。やがて縊りを戻すようになって、妻におそろしく気に入られるようになる。

!?! ひょっとすると、このフォードル・フォードロヴィッチの妻こそ、例の他人の妻、彼の義人としての偉業が成就される相手なのかもしれない。

またもしかすると、その妹なのかもしれない。

フォードル・フォードロヴィッチは自分の領地をほかの何人かのものと兄とに返してしまった(実際のところ、この兄というのが彼なのではあるまいか?)。となると、この男は兄を愛して、兄に対するやさしい態度には変わりがないものの、必要な場合には彼に向かつてはつきりと、兄さんは悪人だときめつける。それでいながら、事実とは事実として認めながらも、依然としてやさしい態度はくずさないというように、ぜんぜん彼を軽蔑はしていないということになる。活動的な人物ではあるけれど、肝心なのは——それは子供たちに囲まれているときに限られるということなのだ。

彼が心変わりすることなく盲目的に信じているいくつかの理念がある。とりわけ、問題になるのはいくつかの社会的理念だ。しかし彼は共産主義は信奉していない。

民族性について——「問題はまさに、わたしは完全に民族的である、わたしはまったくのロシア人である、ということにある。だがそうは言うものの、わたしにとってはそれはどうでもいいことなのだ」また実際に彼は、自分が民族的であるかどうかなどということ、あまり気にはしていない。ところが不思議なことに——民衆は彼と接触するたびにいつも(N・B このような接触の場面を小説の中で作り出すこと)——完全に、しかもはつきりと、彼を自分たちの仲間であると認めるのである。(へI、一六ページ)

(子供たちは古典主義教育を呪っている。カトコーフ(注)に対する陰謀。だがフォードル・フォードロヴィッチは彼らの論拠を完膚なきまでに論破する、そこで彼らは今度は逆にカトコーフの崇拜者となる。)

N・B フォードル・フォードロヴィッチが結婚するのは情熱によ

るものでも、愛によるものでもなく、一種の家庭の事情によるものである。花嫁は彼に対しておそろしく冷たい（捨てられた子供のことでの結婚がご破算になる前）。フョードル・フョードロヴィッチは良い家柄（だがいまだでは落ちぶれている家系）の出。

N・B 馬鹿（神へがかり？）を車両の場面に（それに浴場の場面にも——足）入るべきであるかどうか、同様に若い男も？（この若い男は彼と張り合っているということにしてもよい）。彼こそは他人の妻の情人にほかならない（正義感によるはなれわざ）、そしてこの他人の妻こそはフョードル・フョードロヴィッチのかつての婚約者。

フョードル・フョードロヴィッチの会話——

彼女（腹立たしげに）。なにも言うことはありませんわ、あなたはそれで得々としているんですものね。

フ・ヘヨードル・フ・ヘヨードロヴィッチ。これがわたしのたいへんよくない欠点であるということには、わたしは別に異存はないさ（N・B とは言うもの彼のはこの欠点について考えたことなどは、これまで一度だつてなかったのだ）。

彼女。なにも言うことはありませんわ、どうせ口先だけでは本心なんて分かりっこありませんものね。

フ・ヘヨードル・フ・ヘヨードロヴィッチ（いささかびっくりしたように）。へえ、あなたはわたしの本心を見抜こうとされたんですか？ わたしはまた、あなたはさりげなく話をしているのだとはかり思っていたんだが。

彼女。フョードル・フ・ヘヨードロヴィッチに対してやさしい感情をいだき、彼と口をきいているときは、彼は好もしい男だと思っ

ている。だがその実ひそかに心の中では『いいえ、この人はどうにもやりきれない男なのよ！』（つまり夫として、男としてである）とはっきり匙を投げてしまっているのだ。

N・B フ・ヘヨードル・フ・ヘヨードロヴィッチの（一見そのように見える）尊大さと落ち着きはらった態度こそ、実は彼に対する彼女の憎悪の原因であつたし、捨てられた子供のことがもとで起こった決裂の場面をお膳立てしたものであつた。

彼女は（それにほかの多くの人たちも）フョードル・フ・ヘヨードロヴィッチは、人生のことも人間のことにもなにつ分かつていない子供だと思つている。ところが思いがけなくそのフョードル・フ・ヘヨードロヴィッチが、いよいよそのときになると（だがまったくだしぬけに、しかもそんな場面をセットすることなどは考えずに）、心の奥底で思はずぞつとなつたほどの、彼女の魂の心理状態を、残るくまなく彼女に、それも平然として、しかも冷たいと言つてもいいほどの口調で、話して聞かせたのである。「でもこうしたことなにもかも洞察して、人間というものがお分かりだったのなら、どうしてあなたはいつも冷たく構え、平然としていられたのですか」と彼女は「一七ページ」彼に向かって叫ぶ。

「しかしわたしは別に冷たくもなければ、落ち着きはらつてゐるわけでもないよ」と彼は彼女に答える。だがまるでなにを言われたのか分からなかつたように、冷やかで平然としている。

この謎の答えは、彼が *Idea fixa*（固定観念）にとらわれていることにある。このような人たちは誰でも、たとえ刑場へ曳かれて行くときでも平然としているものなのだ。

彼は四十歳、彼の弟（あるいは腹違いの弟としたほうがさらによからう）のフォードル・フォードロヴィッチは——二十七歳。

腹違いの弟。（これについてはもっとよく考えること。）

彼は思いがけない（と言うことは彼にとつてはまったく思いがけない）、彼が勝手に裏切つて、彼によつてさんざん苦しめられた妻に対する、嫉妬の発作に見舞われる。彼はこれは自尊心（《による》）の発作であると考えて、一笑に付そうとした、だが激情が彼を押しつぶす（夢。ゴリヘーツィン）、——決闘、彼女の目の前であいつを殺してやろう、そうしたら彼女はいったいなんと言うだろう、と思つたりする。彼女の《彼に寄せる》ゴリーツ（ヘイン）に寄せる愛情。彼の彼女に対する激しい愛情。犯罪。

彼は——家柄はあまりよくない、どこかのある官吏の息子、しかし教育の点では最高でよく知られた人物。彼は、もしかすると、家柄がよくないことを恥ずかしく思い、そして悩んでいるのかもしれない。（N・B 弟が彼について、あるいは彼に向かつて、こんなことを言う——「あなたは貴族でないことを、恥じているのじゃないかな」）

N・B 司法官試補。（零落した家庭の長兄、家にはかり閉じこもっている義人ではあるまいか？）彼は結婚する前に頼打ちを受け（そのいきさつと事情）、それが原因で彼女はつまり彼と結婚することになつたのだが、あとになつてこのことを蒸し返して彼を非難する（彼女の心の中には「わたしの公爵」云々を口にしている）。彼の内部には墮落にもなうありとあらゆる卑劣さと、崇高な思想感覚がそっくりそのまま同居している。「わたしの内部には墮落にもなうありとあら

ゆる卑劣さがひそんでいる」（秘められた淫蕩な生活）。伯爵の屋敷で働いている若い男の子は——彼の弟。（もしかすると、キリストや神について説教めいたことを口にするところがあるかもしれないが、その実、彼は無神論者なのだ。）聖像を真（ま）二つに叩き割つた。

子供たちの帝国。

（崇高な偉業を a Piste（別箇に、イ）、独立したエピソードとして挿入する必要はない。）

N・B この人物の性格を匡正し、濃縮して（認識して）もっと力強いものにする。もっと感じのいい人間に仕立てあげること。（墮落した人間。淫蕩。）（↑I、一八ページ）

N・B!!! 彼は倦怠感につきまとい何事にも無関心であるが、突如として（たびたび）なにか（しかししたいの場合）、性的にだらしのない、とてつもないことをやつてのけたいという、突発的な衝動にかられることがある。またしばしば立派なことをやってみたくともある（だが彼はいつもきまつてそれを台無しにしてしまい、とどのつまりはなにかみだらで、秘密めいた、恐ろしいものにしてしまふのが落ちである）。

彼は——キリスト教の説教者で、公爵夫人が自分の所属する社会とすべての人を捨てて、彼のあとについて行つたのもそのためである。

ところが《彼女が死ぬ》彼は聖像を叩き割る（彼女が死ぬ前か、死んだあと、死ぬ前のほうがいいだろう）。「わたしは墮落した人間だ、わたしは無神論者だ」

《あるいは》いちばん大事な点——彼は《いつも》どうかすると目をみはるほど誠意にみちあふれていて、そのために人を驚かすことがある。

彼こそは妻との関係で身を寄せることになった、伯爵家の総管財人にほかならない。また弟は彼によって助手に取り立てられ（やはり同じ事務所働いている）。Lambert(ランベ)をめぐるいざこざに關わり合うようになったのも、この男が原因である。

N・B(N・B 公爵未亡人との結婚によって彼の財政はいくらか改善された。しかし公爵夫人には自分の財産というものがあまりたくさんはない。)

課題——子供たちをこれに巻き込むべきかどうか？

フォードル・フォードロ(ヘヴィック)チは宝籤たみくしに当たる、だがそれは他人のものであると思つてゐる。ある官吏から買ったものだからである。彼の婚約者とその家族は、それを返そうとする彼の意向に反対して騒ぎ立てる。彼はなにも言わずにさっさと返してしまふが、それが分かるのは結婚の当日になってからである。しかしそれでも婚約者は、返したのは一部だけであると思つてゐるが、そっくり返してしまつたと分かつたときには、もう婚禮はめでたくすんでしまつていた。ところで、ここで思いがけなく捨てられた子供が見つかる。二人は別れることになる。

N・B！問題は、彼が宝籤の賞金を返してやつたその友人は、ただの一カペイカもそれを彼と分け合おうとしなかつたことである。フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は(例によつて)それを善いことであるとも、悪いことであるともきめつけずに、ただの事実として受け入れる。「いまの社会ではこれ以外の現象、これとちがう人間なんてありえないのだ」

彼はいかなることにも、母親を殺した子供たちに対する露骨な無罪判決にすら、困惑を感じることはない。この判決に兄が、なにもかもめちやめちやになるがいいさと悦びの声をあげると、フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)も奇妙な好奇心にかられて彼の顔を見つめ、「そうです、そうです、それとおりですとも、なにもかもすこしでも早くめちやめちやになるといいんですよ」と応じる。しかし弟には、兄(彼)が別の(意味で)「めちやめちやになるがいい」と言つてゐるのが分からなかつたのだ。彼はなにもかも悪魔の手に落ちるがいいという意味で言つたのに、フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は、一刻も早く新しい社会がやつてくるようにという意味に解釈したので。

フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は——社会主義者で狂信者だが、どうやら冷淡で打算的な人間であるらしい。ところが兄のほうは——懷疑主義者で、いかなるものも信じてはいない。フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は——信仰のかたまりで、彼は——絶望のかたまり。

キリストについてフォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は、キリストには理にかなつた点がたくさんあつた、民主主義者で、その信念は強固なものであつたし、二、三の真理はまさに正しい、と意見を述べる。ただし全部が全部みな正しいというわけではないと言ふ。

兄(彼)は、妻と弟の目の前で、フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)に、キリストは自由の上に社会の基礎を置いた、キリストの自由《より》のほかに自由なるものはない、と立証して見せる。《フォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)チは打ち負かされる。》ところが彼、つまり共産主義者のフォード(ヘル)・フォード(ヘロヴィッチ)は、